

大都造営と中都

渡邊秀一*

I. はじめに

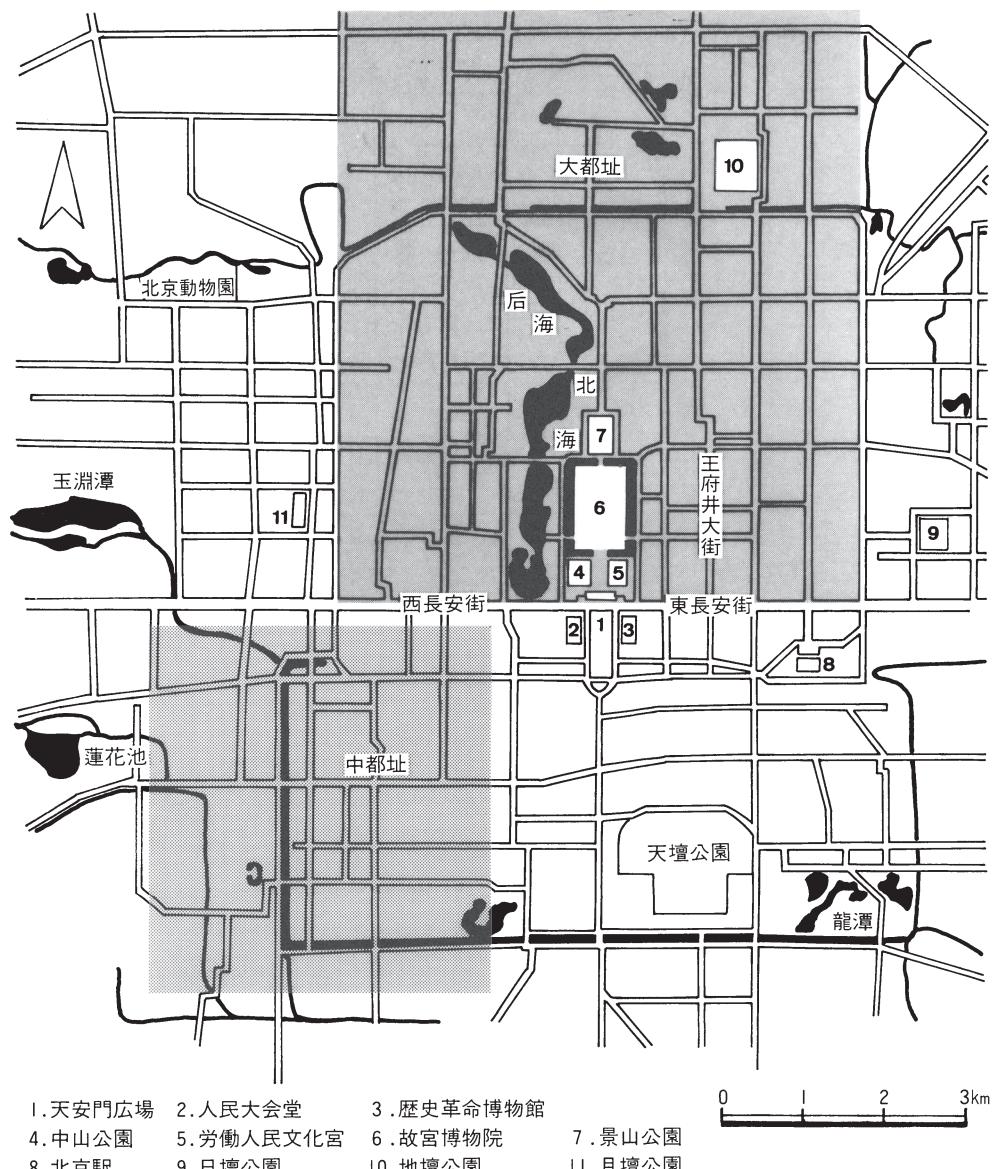
金の中都は、1153年（金・貞元元年）海陵王が上京会寧府から遷都し、1214年（金・貞祐2年）宣宗が開封に再度遷都するまでおよそ60年間にわたる金朝の都城である¹⁾。その城址は北京市南西部で、西長安街の南、南新華街の西に広がっていた（第1図）。中都造営以前、北京は中国北部の地方都市として成長し、遼代には南京と呼ばれる陪都の一つに数えられ²⁾、中国北部の中心都市になっていた。その北京が一国の首都としての成長を開始したのは1153年の中都造営によってであり、その意味で金中都は北京の都市史上で重要な位置を占めている。一方大都是フビライが1267年（至年4年）に中都からおよそ500mの距離を隔てた東北郊外に造営を開始し、1285年（至年22年）に完成した元朝の都城で³⁾、ここに北京は全中国の首都の地位を初めて獲得したのである。この間に中都はモンゴル帝国・元朝の支配下に入り、都城の地位を失ったものの、漕運の便の良さからモンゴル帝国・元朝創始期を通じて中国北部支配の拠点都市となっていた。

一般に大都というと、フビライが造営した新都（以下、北城とよぶ）を指している。しかし、大都が完成したのも中都の完全放棄

は行われず、中都は南城とよばれて北城を上まわる人口を数え⁴⁾、北城とともに大都を構成していた点に注意しなければならない。これまで研究者の関心を引いてきたのは中国都城史上特異な構造をもつ大都北城であったが、北城の造営や南北二城からなる大都の成立が中都（南城）を抜きにして考えられないことは、大都・中都の略述からも容易に推測できよう。大都との関連性という点で、中都も考察すべき課題の多い都城の一つなのである。

このように、中都は、北京の都市史だけでなく、中国都城史の上でも重要な位置を占めると思われる所以であるが、中都研究は基本的史料の絶対的不足や考古学的調査の遅れなどの諸事情が大きな制約となって著しく遅れ、中都の構造さえも十分に解明されてはいない。中都と大都の構造的関連性という点でいえば、大都建設の実質的な始まりと考えられる広寒殿が金の離宮大寧宮址に造営された⁵⁾点以外にはほとんど関心がはらわれていない。確かに中都はモンゴル帝国との戦乱によって荒廃していた。しかし、1261年（中統2年）にはフビライの手によって修築・復興がはかられており⁶⁾、その東北郊の北城の造営に何ひとつ影響がなかったとは考えにくいくことである。そこで本稿では、先学の貴重な成果に加えて、中都・大都の城壁の位置関係を検討し、大都北城の構造と位置選定が中都とどのように関

* 立命館大学非常勤講師



第1図 北京市街と都城址

係していたのかを明らかにしていきたい。

II. 大都北城の構造的特色

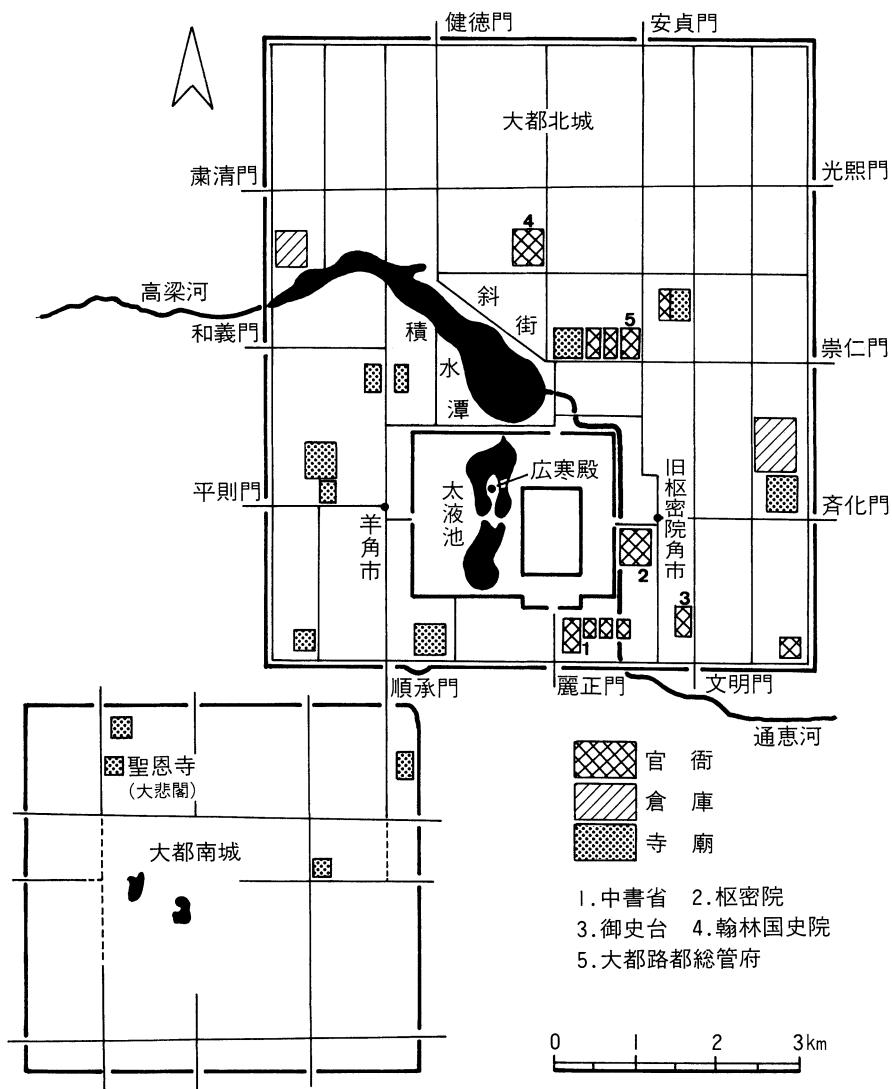
宋・元時代は中国都城の大きな転換期に当たっている。北宋の汴京（現、開封）や南宋

の臨安（現、杭州）・元大都など、唐長安に代表される古代都城とは全く異なる構造をもつ都城が相次いで出現したのである。なかでも注目されたのが、一見『周礼』の理想的都城プランに似た回字型構造をもつ汴京と大都であった。汴京は既存都市を改造したもので、

計画的に新たに造営された都城ではない。しかも、都市域の拡大が先行して結果的に回字型構造になった都城である⁷⁾。こうした点をふまえて、大都北城を中国都城のなかで回字型プランをもつ唯一の都城とみなす考え方方が広がり⁸⁾、それが大都研究を促す一因にもなっていた。その大都北城の構造上の特色とし

て指摘されてきた点を整理すると、ほぼ以下の6点に集約できる（第2図参照）。

- ① 内城が外城北壁を離れて中央やや南部に位置していること。
- ② 商業地「斜街」が内城の北に位置すること。
- ③ 城門数が伝統的プランの12門と異なる



第2図 元大都のプラン

11門で、対称性を欠いていること。

④ 諸官衙が内城外東南部を中心に分散していること。

⑤ 内城内に広大な水域・苑遊地を囲い込むこと。

⑥ 南北二城が分離していること。

①・②は大都北城の『周礼』式プランへの適合を主張する根拠としてしばしば取り上げられてきた。①は中国都城を宮城の位置によって「北闕」型・「中央宮闕」型の二つに類型化し、大都北城を後者の事例とみなすもので、日本人研究者にこうした考え方が多い⁹⁾。これに対して②は、大都の商業地「斜街」・「羊角市」・「旧枢密院角市」のなかで最大の商業地と考えられる「斜街」と内城の位置関係から『周礼』にいう「前朝後市」に適合すると考えるもので、中国研究者にこうした主張が目立っている¹⁰⁾。しかし、内城の位置については村田治郎がオルド（幕营地）との構造的類似性を指摘し¹¹⁾、遊牧民の立場から解釈を試みたほか、「中央宮闕」の実現というには南への偏りが大きい点などの指摘もあり、また商業地と内城の位置関係についても3ヶ所の商業地は内城・積水潭によって隔てられて北城内三地域に計画的に配置されたという見解があつて¹²⁾、『周礼』式プランへの適合という主張に対しては異論が多いのが実情である。③の城門数について多くの研究者が関心を示してきた。陳高華は哪吒太子伝説への付会といふ¹³⁾が、今のところ定説はない。金中都の城門数が13門で、やはり対称性を欠いていた点も含めて、今後の検討課題であろう。

①・②が多数の研究者の関心を引いたのに對して、④は陳高華¹⁴⁾が、⑤は杉山正明¹⁵⁾

がそれを指摘したにとどまっている。④は大都北城の南城に対する性格を考える上で重要な手がかりを提供するもので、筆者は先に官署の分散と移動状況の分析から北城全体が内城的性格を強くもっている点を指摘した¹⁶⁾が、南城に関する研究が進んでいない現状では検討がつくされたとはいひ難い。これは⑤についても同様で、杉山正明は内城の位置および大都の位置選定に関わる問題といい、具体的な検討を今後に残している。さらに、⑥にいたってはこれをきちんと取り上げた論考さえなく、全く検討されていない。

このように従来の大都研究の多くは伝統的な都城プランとの比較検討が可能な範囲での論議にとどまっている。伊原弘は中国都城研究を顧みて、理念としての『周礼』プランを現実の都市に安易に適合することに疑問を呈し、とくに宋代都市への適合については手厳しい批判を加えている¹⁷⁾。こうした批判は宋代都市にのみ加えられたものと考えてはならないだろう。『周礼』式プランへの適合という考えに批判はあるものの依然としてその枠組みから抜け出せず、大都研究に新たな展開がないことを見れば、『周礼』式プランへの拘泥は、宋・元代だけでなく、中国都城研究全体の進展を阻害するという危惧さえ生じるのである。

III. 中都の構造

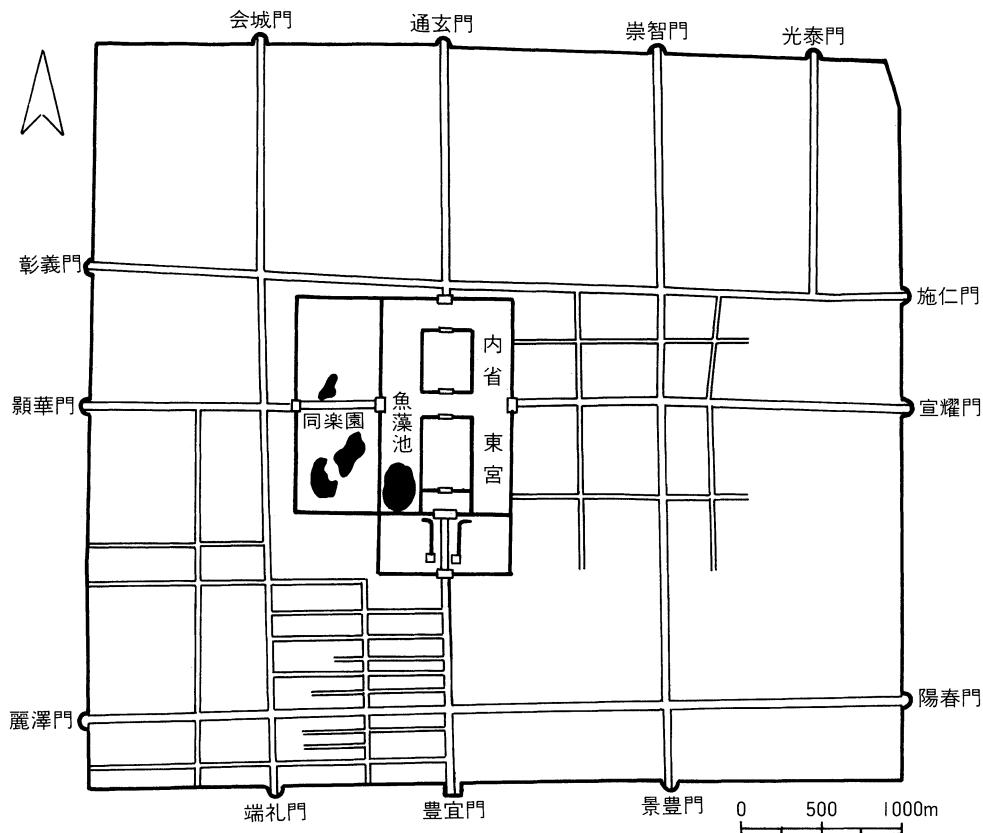
筆者は別稿において中都外郭を取り上げ、外郭の復原と外郭に囲繞された中都の特異な空間構成を検討した¹⁸⁾が、日本人研究者の中都への関心は低く、管見の限りでは大戦後の成果はまったくみられない。こうした事情

は中国でも同様で、朱偰¹⁹⁾、閻文儒²⁰⁾らの先駆的業績のうち、1980年代年以降になって王璞子²¹⁾、于杰・于光度の論考がおおやけにされたにすぎず²²⁾、研究の蓄積は未だ不十分である。とはいえ、こうした論考を通して中都の内部構造の解明は徐々に進んできている。

第3図は『北京歴史地図集』²³⁾所収の、第4図は于杰・于光度『金中都』所収の金中都復原図を簡略化したものである。なお、第4図については若干の加筆をしてある。両図には内城・外城の形態にそれぞれ違いがみられるが、内城が外城北壁を離れて中央部のやや南西に位置し、内城に広大な苑地や水域を

囲い込む点で共通している。于杰によれば、中都には東・西・南・北の四苑があり、南苑を除く三苑が皇城に位置していた。なかでも瓊華島を浮かべた西華潭（別称、太液池）を中心とする西苑は、皇帝が日常的に利用していたという。中都内城の水域・苑地の配置・名称と大都内城のそれは極めて類似しており、于杰らは金の離宮址を利用した大都内城の水域・苑地の配置は金中都に倣ったものであると考えている²⁴⁾。

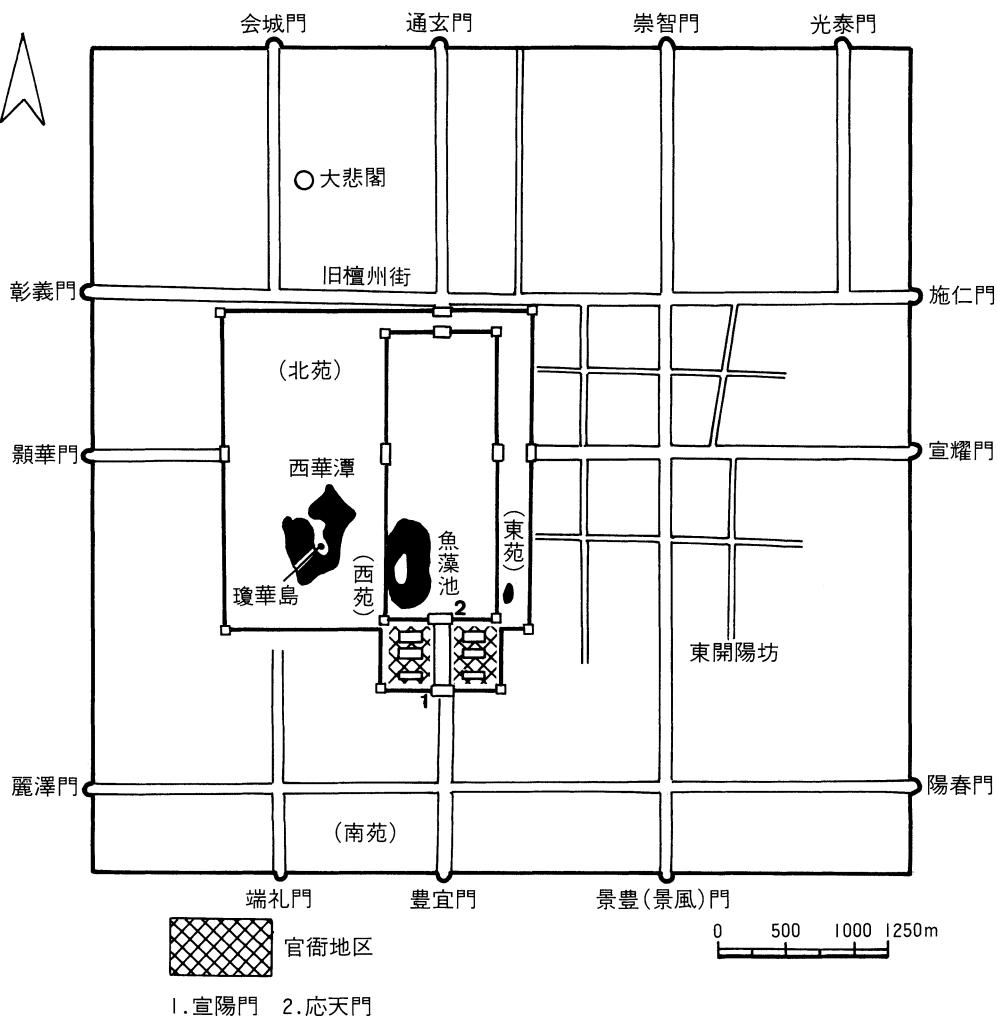
また、中都には主要商業地が三ヶ所あったと考えられている。遼南京（938～1122年）以来の商業地であった旧檀州街に加え²⁵⁾、海



第3図　金中都復原図（1）

陵王の遷都以降に旧檀州街の北に位置する大悲閣付近、東南部の東開陽坊付近に新たな商業地の形成が進んだのである²⁶⁾。とくに大悲閣周辺地域は元・大都南城の商業中心地となっており、金朝から元朝にかけて商業中心地が旧檀州街から大悲閣周辺に遷移したものと思われる²⁷⁾。旧檀州街と大悲閣周辺のいずれであったにせよ、海陵王以降の商業中心地が内城の北にあったことにかわりなく、大都の

位置関係とよく似たものになっている。しかし、大都北城「斜街」の商業的繁栄が1292～93年（至元29～30年）の通惠河開削によって積水潭を起点とする漕運ルートが完成したことに負うところが大きかった²⁸⁾のに対して、中都には積水潭に相当する水域はがなく、中都の商業配置を大都が倣ったとはいいくらい。ただ、遼南京以来続いてきた内城北部への商業地配置が通惠河開削後の大都においてもそ



第4図 金中都復原図（2）

うした商業配置を可能にしたとはいえよう。

中都における諸官衙の立地については、樓鑰の『北行日錄』が應天門南面西側に北から六部・三省あるいは尚書省・会同館、東側に北から太廟・球場・來寧館があり、宮城西南隅に登聞檢院があったと記録しているほかは不明である。しかし、行政上の中枢機関である三省・六部が皇城内に立地していた点だけをみても大都とは明らかに異なっている。

以上のように中都は、官衙の立地で大都と異なるが、内城の構造やその位置、商業配置の点で、大都との極めて類似した特色をもっている。それらは中都が遼南京から継承したもので、決して中都の独創的な特色というものではない。しかし、遼・金と同じように北方遊牧民族系の元にとって金中都は大都建設のための格好のモデルであったに違いない。

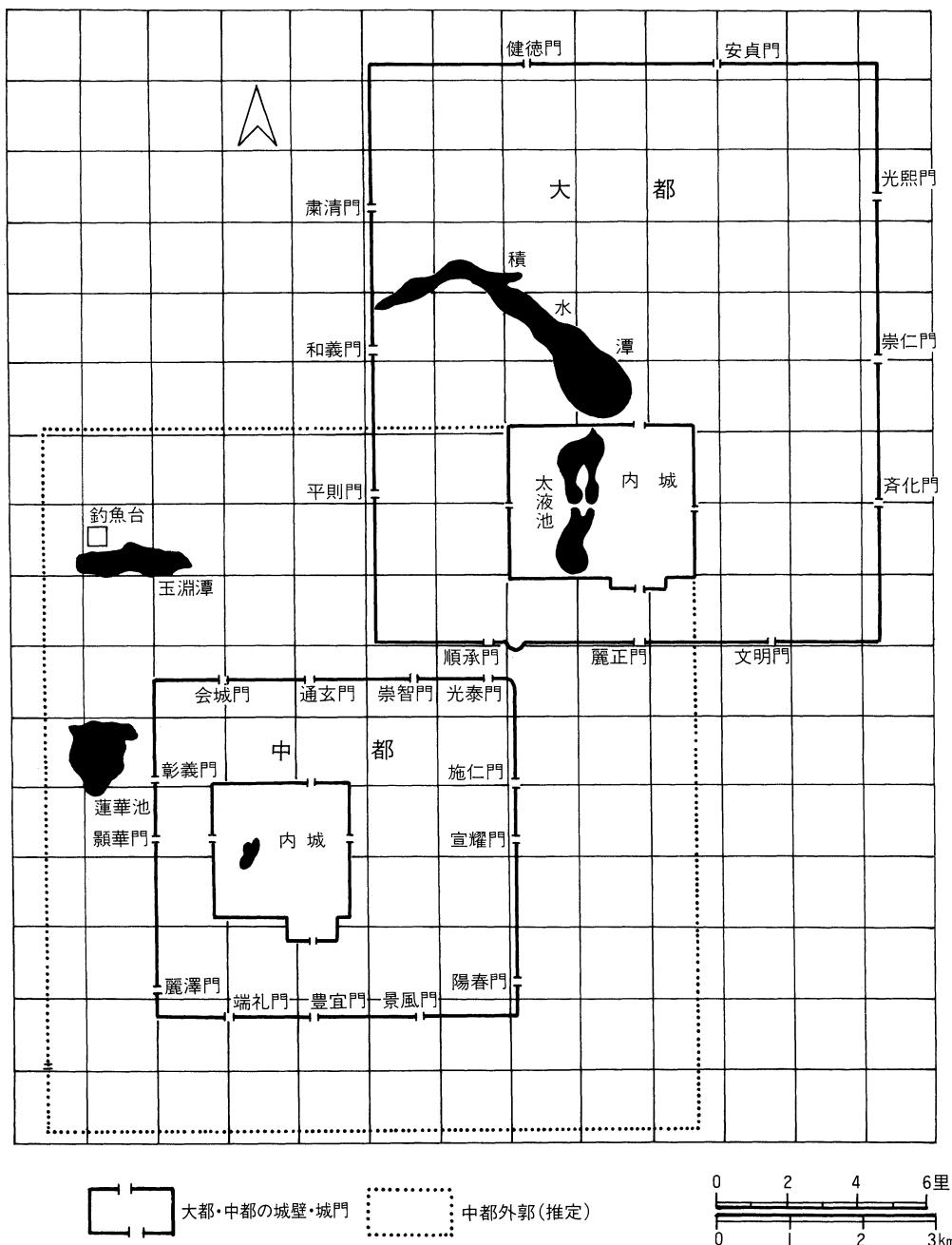
V. 大都の位置選定と中都

大都の内城・苑地・商業地の空間配置が中都のそれに極めて近いことは前章で述べた通りであるが、杉山がいうように苑地・水域を囲い込んだ大都内城のプランは大都北城の選地に関わっている。大都が中都北東部に建設され、内城が中央やや南に偏った理由としては、瓊華島広寒殿から大都宮城の建設が始まったこと、大都北城中央部分を占める積水潭や太液池など高梁河水系の利用をはかったために、結果的に中都北城壁に規制されるようになったことの二点である²⁹⁾。しかし、これらは内城の位置選定を説明するだけで、大都北城全体の位置決定についての説明としては不十分である。そこで、中都の内城・外城および外郭と大都北城の城壁の位置関係を検討

してみると、大都北城が中都を基準に設計されたと考えざるをえないような関連性が多々見いだせるのである。

第5図は2里（1里=478m）四方の方眼の上に中都・大都の城壁・水域を示したものである。金・元代の里制には1里=549m³⁰⁾、1里=554.4m³¹⁾の二説があり、さらに都城造営には1里=360歩（1歩=5尺）という里制とは異なり、1里=240歩（1歩=5尺）の造営制が用いられていたという³²⁾。しかし、そのいずれも中都・大都の城周に合致する結果を得ることができない。そこで本稿では、大都北城の周60里³³⁾と実測値 28.6km³⁴⁾、中都内城の周9里30歩³⁵⁾と図上測定値 4.2~4.5km が合致するように、暫定的に1里=478m として作図した³⁶⁾。その結果、大都北城の南城壁が中都外城北城壁の北1里の地点に平行に建設されているのをはじめ、北城四周の各城壁と中都には以下の関係が認められた。

- (1) 大都北城南城壁は中都外城南城壁からほぼ10里の地点に位置し、それと平行である。
 - (2) 大都北城東城壁は中都外城東城壁の東およそ10里の地点に位置している。これは中都外城の東西距離にほぼ等しい。
 - (3) 大都北城北城壁は中都外城北城壁の北17里の地点に位置し、それと平行であるほか、中都内城北城壁からおよそ20里の地点に位置している。
 - (4) 大都北城西城壁は中都外城東城壁から西に4里、中都内城東城壁から東にほぼ1里に位置し、それと平行である。
- また、大都内城の各城壁と中都には以下の関係が指摘できる。
- (5) 大都内城北城壁は中都内城北城壁の北



第5図 大都と中都の位置関係

およそ10里に位置し、また大都北城北城壁からも約10里の距離に位置している。

(6) 大都内城西城壁は中都外城東城壁の延

長上に位置し、中都内城東城壁からおよそ5里の地点で、それと平行である。また、中都外城西城壁からほぼ10里の地点に位置してい

る。

(7) 大都内城南城壁は中都内城北城壁の北およそ5里の地点で、中都内城南城壁からおよそ10里の地点に位置している。

(8) 大都内城東城壁は中都内城東城壁の東およそ10里の地点に位置している。

加えて中都外郭³⁷⁾と大都の城壁には次の三点の関係が認められる。

(9) 大都内城北城壁は中都外郭北城壁の位置に当たっている。

(10) 大都内城東城壁は中都外郭東城壁の位置に当たっている。

(11) 大都北城西城壁は中都外郭西城壁の東9.2里の地点に位置している。

以上のように、大都内城・外城の城壁の位置は中都の城壁によって説明可能になる。しかも、大都の各城壁は中都城壁から10里の距離を隔てた位置に選定されている。大都北城西城壁だけはおよそ9里の位置であるが、それも中都内城東城壁の延長上にほぼ位置しており、中都との密接な関係は十分に認められる。こうしたことから、城壁の位置からみた大都の位置選定には中都城壁を基準とする意志が明確に働き、それが計画的に遂行されたと考えられるのである。

V. おわりに

フビライは大都北城の造営にあたって中都の完全放棄を行わなかった。このことは少なくとも二つの点で重要な意味をもつていると思われる。その一つは、多くの研究者が認めるように、大都の位置選定が中都によって規制されたという点である。これまで指摘されてきたのは専ら内城の位置選定に関わるもの

であったが、中都と大都の関連はそれだけにとどまらない。大都北城の構造的特色の多くがすでに金中都にみられたほか、大都の城壁も中都の城壁から10里の距離を隔てた地点に位置しているなど、大都は構造的に中都をモデルとし、中都を基準として位置の選定が行われていたのである。

また他の一つは、中都の存続を前提としたあるいは中都の存続と矛盾しない大都造営計画が立てられた可能性が指摘できるという点である。北城の城外に城外町の形成が進んでいたことは既に述べたが、その城外町はマルコ・ポーロの記述によれば北城を機能的に補完する性質³⁸⁾のものである。こうした城外町を視野に入れて北城造営が進んだとすれば、その大都造営計画は北城建設だけではなく、城外町あるいは南城を含めたより広域的な計画として立案されていた可能性も考えなければならない。

園田英弘は「みやこ」の条件として王宮性（王宮の所在地）・首都性（他に隔絶した政治的中心）・都会性（他に隔絶した経済的実力と文化的な卓越）の三つを挙げている³⁹⁾。これにしたがえば、大都北城は王宮性・首都性の二点で南城に対して明らかに優越し、元朝の「みやこ」大都の核心を形成している。しかし、「都会性」という点になると北城と南城の関係はやや複雑である。園田によれば「都会性」は徐々に獲得される性質のもので、北城はその成長につれて「都会性」を備えていく。それは南城との関係でいえば「都会性」の重心が南城から北城へ遷移していく過程であるといってよからう。しかし、それによって南城が「都会性」を喪失し、「みやこ」でなくなったわけではない。北城が「みやこ」

の三条件を満たしたのちにもなお南城が保持していた「都会性」の実態については今後の研究にまたなければならないが、その南城の「都会性」にこそ南城が北城から分離した大きな理由があり、北城と南城の全体を包含する大都造営計画が必要とされる理由があつたようと思われる。

北城を対象に、伝統的な中国都城プランに照らし合わせて大都の構造的特色を把握しようとする歴史地理学的、歴史学的研究は、今日明らかに行き詰まりを見せてている。北城だけでなく、南城あるいは城外町を含めた地域構造の解明が必要な段階にはいっているといつてもよい。南城・城外町に関する研究はこれまで皆無である。中都の構造の解明にさえ多くの課題が残されており、中都を基盤に成立した大都南城の構造の解明するには一層の困難がともなうにちがいない。また、大都の広域的地域計画といつても現段階ではそれを示す具体的証拠には欠け、単なる作業仮説として提示できるにすぎない。しかし、行き詰まりを見せている大都研究を顧みれば、こうした視点からの大都研究も決して無意味なものではなかろう。

注

- 1) 海陵王は1159年（金、正隆4年）あるいは翌1160年から1161年にかけて南宋の併合をめざして都城を南京開封に移している。したがって、中都の都城としての歴史には2～3年間の中斷がある。『大金國志』によれば、都城の南遷が謀られた1158年の時点で、中都は未完成の状態であった。
- 2) 遼五京は南京析津府（北京市）の他、上京臨潢府（内蒙古自治区巴林左旗）、東京遼陽府（遼寧省遼陽市）、中京大定府（遼寧省寧城西15km付近）、西京大同府（山西省大同市）の五京で、上京を都城とし、他の四京は陪都である。南京は遼の支配下にあった長城以南の漢民族を

支配する拠点であった。

- 3) 元朝は大都と上都（内蒙古自治区多倫北西）の複都制をとっている。そのため、中国からロシアの東シベリア・極東地方に及ぶ元の唯一の都城というわけではなく、いわば越冬のための都城である。
- 4) マルコ・ポーロ著、愛宕松男訳『東方見聞録』（東洋文庫158）、平凡社、1970、208～209頁。
- 5) 陳正祥「北京の都市発展」、香港中文大学中国文化研究所学報第7巻第1期、1974、55頁。陳正祥の論文に限らず、この点にふれたものは多い。
- 6) 『元史』世宗本紀、中統二年十月条。
- 7) 伊原弘『中国開封の生活と歳事』、山川出版社、1991、14～25頁。
- 8) 駒井和愛「中国の都城」、（駒井和愛『中国都城・渤海研究』、雄山閣出版、1977、所収）、3～20頁。
- 9) 中国都城を「北闕」型・「中央宮闕」型の二つに類型化するという考え方、那波利貞、駒井和愛論考によって定着した。
那波利貞「支那首都計画史上より考察した唐の長安城」、（『桑原博士還暦記念東洋史論叢』、1930、所収）。前掲8)。
- 10) 例えば、侯仁之「北京城：歴史発展的特点及其改造」、歴史地理学第2輯、1982、1～20頁。
中国建築史編写組編『中国建築史』、中国建築工業出版社、1982、50頁。
- 11) 村田治郎『中国の帝都』、綜芸舎、1981、309～338頁。
- 12) 侯仁之「元大都与明清北京城」、故宮博物院院刊1979年第3期、1979、6頁。
- 13) 陳高華著、佐竹靖彦訳『元の大都』（中公新書731）、中央公論社、1984、80～81頁。
- 14) 前掲13)、94～97頁。
- 15) 杉山正明「クビライと大都」、（梅原郁編『中国近世の都市と文化』、京都大学人文科学研究所、1984、所収）、495～498頁。
- 16) 拙稿「元大都における官署の立地と移動」、（岡山大学創立40周年記念地理学論文集編集委員会編『地域と生活Ⅱ』、岡山大学創立40周年記念地理学論文集編集委員会、1990、所収）、45～57頁。
- 17) 伊原弘『中国中世都市紀行』（中公新書897）、中央公論社、1988、27～57頁。伊原弘『中国人の都市と空間』、原書房、1993、6～60頁。
- 18) 拙稿「金中都の空間構成—外郭をめぐって—」（投稿中）
- 19) 朱偰『遼金燕京城郭宮苑図考』、武大文哲季刊6-1、1936。ただし、筆者未見。
- 20) 閻文儒「金中都」、文物1959年第9期、1959、

- 8～12頁。
- 21) 王璞子「遼金燕京城坊宮殿略述」、科技史文集第11輯、1984、20～43頁。
- 22) 于杰・于光度『金中都』、北京出版社、1989。
- 23) 侯仁之編『北京歴史地図集』、北京出版社、1988、24頁。
- 24) 前掲22)、100～107頁。
- 25) 前掲13)、15～16頁。前掲22)、25頁。
- 26) 前掲22)、218～221頁。
- 27) 大都の都市誌である『析津志』には大悲閣周辺の商業地に関する記録が比較的多く載せられ、北城に劣らない商業的繁栄の様子がうかがわれる。また、著名な寺觀の多くが南城の中部・北部に分布している。そのためか、同書に載せる南城の記事は北・中部地域に偏っており、東開陽坊を含む南部の記事はほとんど見あたらない。
- 28) 前掲13)、64～65頁。
- 29) 前掲15)、497頁。
- 30) 前掲20)、11頁。
- 31) 趙 正之「元大都平面規劃復原的研究」、科技史文集第2輯、1979、26頁。
- 32) 前掲21)、22頁。王璞子「元大都城平面規劃略述」、故宮博物院院刊総二期、1960、69頁。
- 33) 『元史』地理志、大都路条。
- 34) 中国科学院考古研究所・北京市文物管理處元大都考古隊「元大都の勘查和発掘」、考古1972年第1期、1972、20頁。
- 35) 『大金國志』燕京制度。
- 36) 宮城の城周は、前掲22) では 4.5 km、前掲23) では 4.2 km となる。この中間値を9里30歩とすると、1里=478.9 m となる。また、大都60里=28600 m とした場合1里=476.7 m である。
- 37) 第5図の中都外郭は前掲18) による。
- 38) 前掲4)。マルコ・ポーロによれば、城外町には大都を訪れる人々のための旅館・商館があった。同様の記録は『析津志』にもあり、大都来訪者の城外止宿が一般的であったと思われる。ただし、城外町と南城が同じ意味で使用されているかどうかは、検討の余地がある。
- 39) 園田英弘『みやこという宇宙』(NHK ブックス 696)、日本放送出版協会、1994、16～28頁。